様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：３０１０５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０５１７

研究課題名（和文）擬似共通語表現に起因する「誤解」の研究

研究課題名（英文）A study of misunderstanding: with special reference to pseudo-common Japanese expressions

研究代表者
井筒　美津子（Izutsu, Mitsuko）

藤女子大学・文学部・准教授

研究者番号：００４３８３３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、文末詞の使用を中心に異方言間コミュニケーションにおける誤解・誤伝達の仕組みを明らかにした。関東・関西方言話者の北海道方言に対する印象調査と北海道方言話者の関東方言に対する印象調査を実施した。関東調査の結果を基に「方言イメージの形成過程」を策定し、その汎用性を関西・北海道調査のデータを用いて検証した。調査結果は報告書にまとめている。
　また、調査の基盤となる文末詞の研究として、北海道方言と共通語の文末詞『さ』の違いに関する研究や、日本語と英語の文末・節末要素の意味・機能や史的発達についての研究、日本語文末詞と独語・仏語等に見られる心態詞との統語的・機能的類似性に関する研究なども行った。

研究成果の概要（英文）：This research proposed a model of a miscommunication mechanism based on the usage of final particles in cross-dialectal interactions. Surveys were conducted in three areas (Kanto, Kansai, and Hokkaido) to investigate the evaluation of the Hokkaido dialect by speakers of the Kanto and Kansai dialects and that of the Kanto dialect by speakers of the Hokkaido dialect. The results were summarized as “DIF(Dialect Impression Formation) Model” and published in the form of a research report.
The surveys were complemented by some other studies, such as a study concerning the usages of the final particle -sa in the Hokkaido dialect and in the Common Colloquial Japanese. Furthermore, a series of relevant contrastive studies were carried out to explicate meanings and functions of Japanese and English sentence/clause-final elements and their diachronic developments, and also to explore syntactic and functional similarities between Japanese final particles and modal particles in other languages.

研究分野：言語学

キーワード：社会言語学　談話研究　方言　誤解・誤伝達　文末表現

１．研究開始当初の背景

日本語という言語は、記録上最古の上古以来、近世に至るまで、常に方言的多様性を内包した存在としてのみ定義し得た。古くは万葉集からも確認されるように、各方言間には語彙・文法において、相当な差異があり、出身地を遠く隔てた者同士が互いに会話をすれば、相通じないことが普通であった。しかし、明治を迎え、言文一致運動などの影響により、標準語が定められることで、「方言の衰退・共通語化」が進むことになる。特に学校教育などの現場では、「方言札」なるものが用いられ、「方言撲滅運動」などが進められるようになり、少なくとも公共性を有する場では方言の姿が失われていった。

日本語に起こったこうした状況は、マスメディアの発達によってさらに大きな変化を被ることになる。とりわけ、現代の出版物や番組の影響は絶大で、今日の漫画やアニメ、ドラマやバラエティー番組で用いられる言葉の影響力は一層増している。そのため、戦後、特にテレビ普及後の数十年の間に、日本全国の「方言」は劇的な変化を受け、衰退の一途を辿っているように見える。実際、伝統のある俚諺や方言的語法は、若者層で用いられないばかりか、理解されないことも少なくない。

こうした動向から一見すると、全国の「方言」が均質に向かい、長きに渡って存在し続けた異方言話者同士の意思疎通の困難さが克服されたかに見える。確かに、現在の首都圏には、明治以前には考えられなかったほどの多様な地域からの出身者の流入が続いているが、そこにはかつてあったような意志疎通の困難さは存在しない。

しかしながら、実際には、ある程度の意志疎通が可能となったがゆえに、新たな意思疎通の問題が生じている。それは、「気づきにくい方言」（沖 1999）とも呼ばれるものに起因し、最も由々しき場合には「方言殺人」（井上 2007）なるものを引き起こすこともある。あるいは、それに至らぬまでも、異なる方言地域出身間の言語表現上の誤解がその人間関係に軋轢や摩擦を引き起こし、思わぬ事態を招くということが、今日の日本各地で生じている。

例えば、共通の友人のメールアドレスを尋ねられた青森方言話者が「俺知らね」と答えて、その後の友人関係を著しく損ねた例。単純作業を一人黙々としていた大阪出身者が「もう疲れたがな」と暗に助力を求めたが、周囲の者はそれを独り言と受け取って黙っていたため、酷く冷たい集団だという印象を与えた例。無理なことを頼まれて断れずにいる友人を庇おうとして神奈川出身男性が発した「だから出来ねえっつってんじゃんかなあ」という言葉を聞いた北海道方言話者が、男性は酷く粗暴な性格だと思ってその後口を利かなくなった例。熊本から大学に進学した男性が自己紹介の際に「訛ってるでしょう」と遠慮がちに尋ねたところ、ゼミの上級生達には馴れ馴れしい奴だと思われた例。いずれも共通語と同じ（あるいは類似した）語形ながら、当該方言で異なるニュアンスを持つために、共通語に照らした解釈では誤解され、粗暴あるいは無礼な態度だと解されがちな表現である。そのために、思わぬ所で人間関係上の摩擦の原因となりやすい。

こうした一見共通語的でありながら、地域方言的な意味・機能・ニュアンスを発達させている表現は、語彙に相当する俚諺に限らず、語法や語尾にも数多く見られる。中でも、後者は特に他方言話者にとって理解が難しい。本研究代表者らは、過去に採択された課題（基盤研究(C)20520360）を含む研究において、この語尾に該当する要素の意味・機能分析を行なってきた。例えば、北海道、大阪、広島の各方言で用いられる文末の『そして』、『しかし』、『ほいで』などは、元来の接続詞的機能を失い、「驚き」、「苛立ち」、「不満」といった情緒的内容を伝える用法を発達させている（同様な用法は、豪州英語の but などにも観察される）（Izutsu and Izutsu 2010）。これらを共通語の表現として解してしまうと、当該方言で前提とされる十分なニュアンスや意図は伝わらない。場合によっては、思わぬ誤解を招き、人間関係に摩擦や軋轢を生じかねない。

２．研究の目的

本研究課題では、北海道という言語コミュニティーを出発点として、一見共通語的でありながら、地域方言的な意味・機能を発達させている表現（擬似共通語）等に起因する誤解・誤伝達が生ずる背景や要因を明らかにすることを目指す。特に、情緒伝達機能を担っているという点で、他方言話者の誤解・誤伝達を誘引し易い文末詞の方言的解釈の多様性を詳らかにし、その多様性が故に生ずる誤解・誤伝達の仕組みを解明することを企図とする。本研究では、北海道を中心として日本語の幾つかの方言が主な研究対象となっているが、日本語の文末詞・情緒表現は諸言語の final particles（文末詞）や modal particles（心態詞）とコミュニケーション上の意味・機能の点で高い類似性を示すため、それらとの対照分析を通して日本語の情緒伝達表現への理解を更に深めることも目的の一つとする。

上記の研究目標を実施するための具体的な研究計画として、(1)「北海道方言に対する他方言話者の印象調査（関東・関西印象調査）」、(2)「北海道方言話者の他地域方言に対する印象調査（北海道印象調査）」、(3)「情緒的意志疎通の仕組みを明らかにするための記述モデルの策定」、(4)「諸言語の final/modal particles の意味・機能の記述」を遂行することを目指す。

３．研究の方法

研究計画(1)と(2)の印象調査実施に向けての研究方法としては、対象方言の自然会話を他方言話者に提示し、全体的な印象や文末表現の使用について尋ねるインタビュー調査を行う。得られたインタビューデータは、(3)の記述モデル策定の基礎資料として活用するために、文字化し、データベースとして編纂する。データベースの公開に当たっては、個人情報の保護順守を伝えた上で、データ公開の同意を得る。

研究計画(3)の記述モデル策定については、①誤伝達の仕組みを記述する一般的モデル、②言語変種（方言）間コミュニケーションにおける方言イメージの形成モデル、という二つのレベルのモデル策定を行う。①については、誤伝達の受け止め方に関するアンケート調査などを実施する。②については、研究計画(1)と(2)から得られたインタビューデータを使用する。両者の記述モデル策定に当たって、関連する文献調査を行い、得られた知見をモデル化の理論的基盤として援用する。

研究計画(4)については、諸言語のfinal particles（文末詞）やmodal particles（心態詞）についての文献調査や言語データの収集を行いながら、当該分野に携わる海外の研究者との交流や情報交換を積極的に行う。

４．研究成果

研究計画(1)については、北海道方言に対する関東方言話者の印象についての調査を関東地方三地点（神奈川県、千葉県、茨城県）で実施した。前採択課題（基盤研究 C 20520360)において編纂した「北海道方言コーパス」（井筒 2011)の中から、10 の会話断片（11 分 12 秒）を抜粋し、会話の全体的な印象と文末表現の使用について、半構造化インタビューを行った（神奈川調査: 協力者 2 名, 92 分 5 秒、千葉調査: 協力者 2 名, 93 分 19 秒、茨城調査: 協力者 4 名, 119 分 41 秒)。 三地点でのインタビューデータは、科研費補助金報告書『擬似共通語に起因する誤伝達分析のための基礎研究』(図書①、以下、番号は「5. 主な発表論文等」に付した番号に同じ）の第 3 章～第 5 章に掲載している。収集したインタビューデータは、質的研究法の一つである修正版グラウンデッドセオリー(M-GTA)を用いて分析し、「方言イメージの形成過程」“DIF(Dialect Impression Formation) Model”策定の基礎データとなった（雑誌論文①、学会発表③)。

関西方言話者の北海道方言に対する印象についての調査は、関西地方三地点（京都府、兵庫県、滋賀県）で実施した。(京都調査: 協力者 3 名, 83 分 15 秒、兵庫調査: 協力者 3 名, 101 分 12 秒、滋賀調査: 協力者 8 名, 91 分 25 秒)。調査結果は、「方言イメージの形成過程」の検証に利用した。京都調査と兵庫調査のインタビューデータは、科研費報告書（図書①)の第 6 章と第 7 章に掲載している。

また、これら調査の基礎研究として、一見共通語的でありながら、地域方言的な意味・機能・ニュアンスを発達させている北海道方言の終助詞『さ』を取り上げ、共通語の『さ』との意味・機能上の違いを、共同注意（joint attention）の観点から明らかにし、その成果を発表した（雑誌論文③、学会発表⑤)。

研究計画(2)に関しては、北海道方言話者の関東方言に対する印象についての調査を実施した。関東方言話者の談話資料（約 10 分 10 秒)を北海道方言話者に聞いてもらい、それに関する半構造化グループ・インタビューを行った（協力者 8 名、約 30 分)。調査結果は、関西印象調査の結果と併せて、「方言イメージの形成過程」の汎用性の検証に用いた。概要については、科研費報告書（図書①）の第 1 章にまとめている。

研究計画(3)においては、誤伝達の受け止め方に関するアンケート調査を実施し、概念構造記述とプロトタイプ意味論による分析を通して、誤伝達が生じる一般的な仕組みとその「捉えにくさ」並びに「扱いにくさ」を明らかにし、その成果を発表した（雑誌論文④、学会発表⑨)。また、言語変種（方言）間コミュニケーションにおける方言イメージの形成モデルについては、関東印象調査のインタビューデータを用いて、「方言イメージの形成過程」“DIF(Dialect Impression Formation) Model”を提案し、口頭発表を行った（雑誌論文①、学会発表③)。

研究計画(4)については、近年注目されている文末接続詞の史的発達や情緒伝達機能について研究し、学会発表や学術論文を通して、一連の成果発表を行った。日本語や英語の等位接続詞や従属節接続詞の文末（節末）用法やそれらの文末詞への発達については、雑誌論文②や学会発表①⑥⑦⑧⑩、図書②③で研究成果を発表した。また、final particles（文末詞）と modal particles（心態詞）の統語的・機能的類似性については学会発表②⑪、図書④で研究成果を発表した。さらに、文内の右方・左方周縁部への固定化が示す意味・機能的特性について口頭発表を行った（学会発表④)。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

①<u>井筒（成田）美津子</u>、井筒勝信、方言イメージの形成過程：関東方言話者の北海道方言に対する印象評価を事例として、『社会言語科学会第 33 回大会発表論文集』、査読有、2014、40-43

②<u>Mitsuko Narita Izutsu</u>, Katsunobu Izutsu, Truncation and backshift: two pathways to sentence-final coordinating conjunctions. Journal of Historical Pragmatics, 査読有,

15(1), 2014, 62-92,
doi 10.1075/jhp.15.1.04izu

③井筒（成田）美津子、井筒勝信、「これって方言だったさ」：共同注意の観点から見た北海道方言の終助詞『さ』、『社会言語科学会第 31 回大会発表論文集』、査読有、2013、146-149

④井筒勝信、井筒（成田）美津子、誤伝達：概念構造とプロトタイプ、『日本語用論学会第 14 回大会発表論文集』、査読有、第 7 号、2012、査読有、225-228

〔学会発表〕（計 11 件）

①Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, Coordination and backgrounding: “stopgap” subordinators *and* and *but*, 12th Conceptual Structure, Discourse and Language conference (CSDL 2014), November 6, 2014, Santa Barbara (USA)

②Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, Japanese final particles and Danish modal/discourse particles: their meaning, Workshop on modal particles: getting to the bottom of modal particles, July 1, 2014, Sønderborg (Denmark)

③井筒（成田）美津子、井筒勝信、方言イメージの形成過程：関東方言話者の北海道方言に対する印象評価を事例として、第 33 回社会言語科学会、2014 年 3 月 15 日、神田外国語大学（千葉県千葉市）

④Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, Fixation at right and left peripheries, 13th International Pragmatics Conference, September 12, 2013, New Delhi (India)

⑤井筒（成田）美津子、井筒勝信、「これって方言だったさ」：共同注意の観点から見た北海道方言の終助詞『さ』、第 31 回社会言語科学会、2013 年 3 月 13 日、統計数理研究所・国立国語研究所（東京都立川市）

⑥Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, Exaptation and adaptation: two historical routes to final particles, Societas Linguistica Europaea (SLE 2012), 45th annual meeting, September 1, 2012, Stockholm (Sweden)

⑦Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, Conjunctions and sentence-final particles: two processes of grammaticalization, 11th Conceptual Structure, Discourse, and Language Conference (CSDL2012), May 20, 2012, Vancouver (Canada)

⑧Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, Path to (inter)subjectivity: exaptation and adaptation, International Conference on Grammaticalization Theory and Data (Gramm2012), May 10, 2012, Rouen (France)

⑨井筒勝信、井筒（成田）美津子、 誤伝達：概念構造とプロトタイプ、日本語用論学会第 14 回大会、2011 年 12 月 4 日、京都外国語大学（京都府）

⑩Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, Truncation and backshift: two syntactic sources of sentence-final conjunctions, 12th International Pragmatics Conference, July 5, 2011, Manchester (United Kingdom)

⑪Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, From discourse markers to modal/final particles: what the position reveals about the continuum, 12th International Pragmatics Conference. July 5, 2011, Manchester (United Kingdom)

〔図書〕（計 4 件）

①井筒（成田）美津子、擬似共通語に起因する誤伝達分析のための基礎研究（平成 23～26 年度科学研究費補助金報告書）、藤女子大学、2015、183

②Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, “Final hanging *but*” in American English: where a formal coordinator meets a functional subordinator, In Sylvie Hancil and Ekkehard König (eds.) Grammaticalization: Theory and Data. John Benjamins, 2014, 298(257-285)

③Mitsuko Narita Izutsu, Katsunobu Izutsu, ‘Leap’ or ‘continuum’?: grammaticalization pathways from conjunctions to sentence-final particles. Mike Borkent, Barbara Dancygier, and Jennifer Hinnell (eds.) Language and the Creative Mind, CSLI Publications, 2014, 444(83-99)

④Katsunobu Izutsu, Mitsuko Narita Izutsu, From discourse markers to modal/final particles: what the position reveals about the continuum, Liesbeth Degand, Bert Cornillie and Paola Pietrandrea (eds.) Discourse Markers and Modal Particles: Categorization and Description. John Benjamins, 2013, 239(217-235)

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
井筒　美津子（IZUTSU, Mitsuko）
　藤女子大学・文学部・英語文化学科・准教授
　研究者番号：００４３８３３４

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし

(4)研究協力者
　井筒　勝信（IZUTSU, Katsunobu）